

『京の水』の諸板

藤川玲満*

一 はじめに

『京の水』は、『都名所図会』（安永九年刊）をはじめ畿内を中心とする名所図会を著した秋里籬島の作品で、内容は内裏の建造物と平安京の制度を解説したものである。麟之卷、鳳之卷の大本二卷二冊と、「大内裏御図」「花洛往古図」の図二鋪から成り、寛政二年冬至の大江資衡の序文を付して小川多左衛門、野田藤八、吉野屋為八の三軒から出版された。先に、拙稿「『京の水』考」^[1]において、この作品の典拠と、作者籬島と寛政初頭の内裏造営との関連について述べたが、その際諸本のなかに小川・野田・吉野屋による初期の板本の刊記に、年記部分に紙を貼って訂正を施したものが見られた。本稿ではこの点に注目し、諸板について整理するとともに『京の水』の出版について考えたいと思う。

二 諸板考

まず諸本を調査したところ、『京の水』の板本には、小川多左衛門・野田藤八・吉野屋為八板、河内屋太助板、河内屋源七郎板、河内屋喜兵衛等板、著屋宗八板があることがわかった。そしてこれらは、同一箇所での板木の欠損状況から判断して、おそらくこの順に板行されたと思われる。では、以下それぞれの板について整理していく。

小川多左衛門・野田藤八・吉野屋為八板

板元は三軒とも京都の書肆である。小川多左衛門は、柳枝軒と号し、貝原益軒の編著や『日本輿地通志』等を刊行している。秋里籬島の著作では、ほかに『大和名所図会』以降の名所図会の板元に名を連ねている。野田藤八は橘枝堂と号する。『京の水』のほかには籬島の著作との関連は確かめられない。吉野屋為八は殿（戸野）氏、永昌堂と号する。『都名所図会』の板元として知られるように籬島とは大変関連の深い書肆であ

る。小川・野田・吉野屋板には刊記が三種類ある。

a 「寛政二載庚酉正月」の刊記をもつ板

駒澤大学図書館蔵本（667.4/9-1.9-2）、同志社大学蔵本（291.62//k12//1.2s）、茨城大学図書館管文庫蔵本（81.63）がある。まず駒澤大学図書館蔵本の書誌を記し、つづいて他の二点での相違点等を述べる。

駒澤大学図書館蔵本

〔表紙〕 縦二五・三cm、横一七・二cm。くすんだ青色、無地無紋の原表紙。^[2]

〔外題〕 表紙中央に双辺枠の原題簽。「上 京之水 麟之卷」「下 京之水 鳳乃卷」。

〔見返〕 第一冊のみ、装飾枠のなかに「京之水」。印刷は薄墨色。

〔内題〕 「京の水麟之卷」^{リンノマキ}、「京の水鳳之卷」^{ホウノマキ}。

〔尾題〕 「京の水麟之卷終」^{リンノマキ}、「京の水鳳之卷大尾」。

〔板心〕 第一冊、序のみ板心に「序一（一）」とあり、三丁目からは裏ノドに、

上壹（上三十一）屋。第二冊下壹（下廿五大尾）。

〔丁数〕 第一冊三三丁、第二冊二五丁。

〔行数〕 序六行、本文十行。

〔匡郭〕 第一冊（はじめの半丁）縦一八・五cm、横二二・〇cm。

〔挿画〕 第一冊（七ウ八オ）（一七ウ一八オ）（二五ウ二六オ）。第二冊（五ウ六オ）（一三ウ十四オ）（一九ウ二〇オ）。

〔序〕 「寛政庚戌冬至之日 平安 大江資衡撰」

〔刊記〕 「寛政二載庚酉正月 京都書林 小川多左衛門 野田藤八 吉野屋為八」

同志社大学蔵本は、題簽の位置、刷りの濃さ、紙の質が第一冊と第二冊で異なる点などから、板の違うものを取りあわせたと考えられ、第一冊は本文の異同（後に述べる）から後刷とわかる。したがって第二冊のみが寛政二年の刊記をもつこの板であり、書

〔キーワード〕 京の水／秋里籬島／諸板／内裏／平安京

*平成十四年度生 国際日本学専攻

誌は駒澤大学図書館蔵本に同じである。付属の「花洛往古図」は表紙はなく、畳んだ表面に題簽を付す。これに板元の印などはない。「花洛往古図」の詳細については、bのお茶の水女子大学蔵本のところで述べる。

茨城大学図書館管文庫蔵本は、題簽の位置が異なる。両冊ともに表紙の中央ではなく左上に題簽の剥離した跡があり、そこに「京の水、麟の巻」「京の水、鳳の巻」と打ちつけ書きがある。この本に特徴的なのは、第二冊巻末に、板元の一軒である小川多左衛門の蔵板目録「柳枝軒蔵書目録 六角通御幸町西へ入町小川多左衛門」五丁（『古今醫鑑』「尺牘道標」など計二十九一点）、「柳枝軒私書目録」四丁（『義雲和尚語録』「遺教経」など計二十四二点）を付すことである。

b寛政二年の刊記に紙を貼り、「寛政三年辛亥四月発行」とした板

お茶の水女子大学蔵本（D352771-3）、龍谷大学図書館写字台文庫蔵本（Q9141/31.w/12 Q9141/31/付12）がある。表紙・見返・内題・尾題・板心・丁数・行数・匡郭・挿画・序はaの駒沢大学図書館蔵本に同じである。題簽の位置に違いがあり、お茶の水女子大学蔵本は表紙の左上、龍谷大学図書館写字台文庫蔵本は表紙中央である。この二点の刊記が、寛政二年の刊記の「二載庚酉正月」の部分に「三年辛亥四月発行」と刷られた紙（幅一・四cm、長さ約七cm）を貼って「寛政三年辛亥四月発行 京都書林 小川多左衛門 野田藤八 吉野屋為八」としたものである。

ここで「花洛往古図」と「大内裏御図」について、この二点に拠って書誌を記しておく。まず、お茶の水女子大学蔵本は「花洛往古図」を付す。縦一〇・三七cm、横八・三二cm、匡郭は縦九・六二cm、横八・〇二cmで、表面の滑らかな、やや厚手の紙質である。表紙はなく、縦二・五七cm、横一・七〇cmに畳んだ中央に「京の水 花洛往古圖 桓武天皇延暦年中平安城開闢より順徳院承久年中まで大内裏の間凡四百三十年計の京師の相を因なり 今寛政三年より五百年前の体也 左京右京の町壹町の廣四十丈是を分間積て方四方とし大路小路の廣は四丈を一分とす 此法数を以て廣狹を知べし」と記した題簽を付す。お茶の水女子大学蔵本には図の南西の部分の角に「京都書林 小川多左衛門 野田藤八 殿為八」の押印（縦四・一cm、横一・五cm）がある。

龍谷大学図書館写字台文庫蔵本は、「花洛往古図」「大内裏御図」を付す。「花洛往古図」は、畳んだ表裏に赤茶色の表紙があり、中央に題簽を付す。板元の印はない。「大内裏御図」は、縦七・三二cm、横五・五二cm、匡郭は縦六・八五cm、横五・三九cmである。表面の滑らかな厚手の紙質で、畳んだ表裏に生成の表紙（縦二・四二cm、横一・四〇cm）があり、中央に双辺枠の題簽「京之水 大内裏御圖 完」を付す。図は匡郭をはじめ、

欠けた部分がなく、大変きれいな刷りである。図の左下の裏面に、お茶の水女子大学蔵「花洛往古図」にあるものと同じ「京都書林 小川多左衛門 野田藤八 殿為八」の押印がある。

c「寛政三年辛亥四月発行」（すべて直に刷られた）の刊記をもつ板

「京の水」の本文には一箇所異同がある。そしてこの刊記をもつ板本のなかに、改変前のものと改変後のものがある（a、bにあげたそれ以前のものすべて改変前のものである）ことにより、改変されたのはこの段階と考えられる。異同があるのは、第一冊の三十一丁表「羅城門」で、次の傍線部の箇所が括弧内のように入木、改変されている。

平安城外郭南面の正門なり。朱雀通今千本通ト云九條大路今四塚ト云此所の民家の東類の奥に今に至って礎石遺れりといふ にあり其南ハ往還道にして鳥羽の作り道。久我驥を經て山崎の関所に至る此街道今にあり上鳥羽の端より西南に至るなりこれを直に行は淀八幡に至り大坂道也又四塚より西へ至る街道あり秀吉公朝鮮征伐の關き給ひし道也（秀吉公朝鮮征伐の時ひらき給ひし道也）俗に唐街道といふ久世橋向明神を經てこれも山崎に至る是山陽南海兩道の喉口也。

改変前の板

国立国会図書館蔵本（Q91624359k）、東京大学総合図書館蔵本（J30 1125）、陽明文庫蔵本、石川県立図書館李花亭文庫蔵本⁴⁾がある。

これらは、題簽の位置は表紙中央で、見返・内題・尾題・板心・丁数・行数・匡郭・挿画・序についてもaの駒澤大学図書館蔵本に同じである。刊記は、全て直に印刷されて「寛政三年辛亥四月発行 京都書林 小川多左衛門 野田藤八 吉野屋為八」とある。「三年辛亥四月発行」の部分は、寛政二年の刊記にbの訂正の貼紙に刷った板木を入れたと思われる。また、石川県立図書館李花亭文庫蔵本は、同文庫蔵「京之水花洛往古図」が付されていたのではないかと思われるが、これにはお茶の水女子大学蔵「花洛往古図」にあるものと同じ板元の押印がある。

改変後の板

改変後の板本は、題簽の位置と見返・序文の有無でiからiiiの三種類にわけられる。ただしこれらは、板木の欠損箇所を検証したところ、印刷・板行された時期による差異ではないことがわかった。製本が統一されていなかったと思われる。

i 題簽は表紙中央、見返「京之水」と序文を付す。（東京大学総合図書館蔵本（J30 37）、東京都立中央図書館加賀文庫蔵本（加2653）、大阪女子大学蔵本⁶⁾、筆者の所持本）

ii 題簽は表紙左上、見返はなく、序文を付す。(豊橋市中央図書館蔵本(和39157)、今治市河野美術館蔵本⁷⁾)

iii 題簽は表紙中央、見返「京の水」を付すが、序文を欠く。これにあたる京都大学谷村文庫蔵本は、第二冊巻末に板元の一軒である野田藤八の蔵板目録「平安書林橋枝堂蔵板目録 京二条通富小路西江入町野田藤八」(『古語拾遺言餘抄』『用藥須知』など計一〇五点)二丁を付す。

河内屋太助板

河内屋太助は森本氏、文金堂と号する大坂の書肆である。籬島との関連としては、籬島の著作の板権の多くが吉野屋為八から河内屋太助に渡ったという経緯がある。河内屋太助による板は刊記に四種類あり、年記があるのは文政六年板のみだが、板本の印刷を比較したところ、a、b、c、dの順に板行されたと思われる。

a 寛政三年の刊記(小川多左衛門・野田藤八・吉野屋為八)を残す板

国文学研究資料館蔵本(ヤ6181-3)、大阪府立中之島図書館蔵本(37158)がある。いずれも題簽は表紙左上にあり、見返はなく、序文を付す。刊記裏に「名所図会目録 森本多助」(『五畿内名所図会』『都林泉名所図会』『都古跡名所図会』『東海道名所図会』『二十四輩名所図会』『大日本国花万葉記』『京の水』)半丁を付すことにより、河内屋太助板とわかる。これらのうち『都古跡名所図会』と『二十四輩名所図会』を除く書物の板権はもと吉野屋為八が所有していたものであり、『京の水』の板権もまた、ほかの吉野屋の板権の多くとともに河内屋に渡ったのであろう。国文学研究資料館蔵本は「花洛往古図」「大内裏御図」を付し、大阪府立中之島図書館蔵本は「大内裏御図」を付す。いずれも表紙はなく、豊んだ中央に題簽を付す。板元の印はない。

寛政三年の刊記を残した板本としてもう一点、京都大学工学系建築専攻図書室蔵本がある。この本はほかと異なる点が三つある。まず、蔵板目録である。蔵板目録は二丁(『韻会玉篇大全』『日本名勝詩選』など計五七点)あり、二丁目に「大坂書林森本文金堂蔵板目録」とある。二つめは刊記の年記下の部分に「大阪府心齋橋通唐物街南衛書坊河内屋太助蔵板製本」という朱印が押されていることである。三つめは付属の図「京の水附図大内裏及洛中之図」である。これは両面刷で、「桓武天皇遷都洛中図」(明治二十八年四月山田可耕齋識凡例、明治二十八年五月十日京都大谷仁兵衛発行)と「桓武天皇遷都大内裏図」である。刊記の河内屋の印と付属の図は明治以降のものであり、後になって押印、添付されたのではないだろうか。

b 無刊記板

国立国会図書館蔵本(39983)と大阪府立中之島図書館蔵本(37159)、大阪女子大学蔵本¹⁰⁾がある。第二冊巻末に河内屋の蔵板目録「文金堂製本目録 大阪心齋橋通唐物町河内屋太助」(計八九点)二丁を付す。題簽の位置は表紙左上で、序文はない。見返には「京の水」ではなく、新たに「籬島秋里先生輯 下河辺拾水画 同梓 京の水 図二面 書式冊 花洛往古図を一面とし大内裏御図を一面とし本朝の史録を考へ古采流布の図の傳写の謬を糺し皇城の殿舎百官の諸寮平安京の興基九重の由縁坊門保伍の圖解四神相應の地といふ訳洛陽長安の町員古采名高き賢哲の殿館歌人の第宅を麟鳳のふたまきにあらはし洛外四方の神社佛閣高貴の山莊和哥の名所川々のなかれまでもいにしへのすかたを圖面にあらわしこれを暁して今を見るの便とす且詩文章及ヒ和哥連哥誹諧を咏ずる一助ともならん抑皇都ハ日本最上の地なれば其地の名産最上に准して京の水と題書する事爾なり」と記している。蔵板目録には「小栗外伝」(初編が文化十年刊)、『古今詠物詩選』(『紀伊国名所図会』初篇・二篇(ともに文化九年刊)などがあり、早くとも文化十年以降の板と思われる)。

c 文政六年板

国文学研究資料館蔵本(ヤ6081-3)、静岡県立図書館蔵本¹¹⁾がある。題簽の位置は表紙左上で、見返と序文はない。刊記は「文政六年癸未九月繡梓 書肆大阪心齋橋通唐物町河内屋太助」とある。静岡県立図書館蔵本には、「花洛往古図」と「大内裏御図」の題簽が挟まれており、これらの二図が付されていたようである。

d 河内屋太助・仁助板

東京大学総合図書館蔵本(38335)がある。表紙左上に薄赤色の題簽を付し、「京の水 上巻(下巻)」と墨書がある。bにはじまる新しい見返を付し、序文はない。刊記は「三都発行書肆」として江戸の須原屋茂兵衛・同伊八・山城屋佐兵衛・西宮彌兵衛・岡田屋嘉七・岡村庄助・永楽屋東四郎・英屋大助、京都の吉野屋仁兵衛、名古屋の菱屋藤兵衛の名を連ね、河内屋太助・河内屋仁助板行、とする。河内屋仁助は、『増訂慶長以来書買集覽』¹²⁾には天保から営業していたとされる。そうだとすると、この板は天保以降のものであるだろうか。東京大学総合図書館蔵本は「大内裏御図」(表紙はなく、豊んだ中央に題簽を付す)を付すが、この図の右下角には河内屋ではなく、お茶の水女子大学蔵「花洛往古図」などにあるものと同じ小川・野田・吉野屋の印がある。

河内屋源七郎板

河内屋源七郎は前川氏、文栄堂と号する大坂の書肆である。この板本に漢字書の広告があるほか、『近世出版広告集成』⁽¹⁵⁾ 収載の目録を見ると、俳諧書や軍書小説類をあつかっていたようである。この板にあたる内閣文庫蔵本(172168)は、題簽の位置は表紙左上、河内屋太助板のbにはじまる新しい見返を付し、序文はない。刊記は「御書物所前川文栄堂 大阪心齋橋北久寶寺町河内屋源七郎」とある。第二冊巻末に『小学正文』『考槃餘事』など計十点の広告を付す。

河内屋喜兵衛等板

三都と名古屋の書肆連名の板であるが、書肆が数軒異なる次の二種類が見られる。

i 江戸須原屋茂兵衛・同伊八・山城屋佐兵衛・岡田屋嘉七・和泉屋金右衛門・岡村庄助・和泉屋吉兵衛・英屋大助、京都吉野屋仁兵衛、名古屋永楽屋東四郎・菱屋藤兵衛、大阪河内屋喜兵衛の全一二軒による板(内閣文庫蔵本(172167))

ii 江戸須原屋茂兵衛・同伊八・山城屋佐兵衛・西宮彌兵衛・岡田屋嘉七・岡村庄助・永楽屋東四郎・英屋大助、京都吉野屋仁兵衛、名古屋菱屋藤兵衛、大阪河内屋喜兵衛・同和助・同卯助の全一二軒による板(高知県立図書館山内文庫蔵本⁽¹⁴⁾)

iiの板元は河内屋太助板のdの河内屋太助・仁助と河内屋喜兵衛・和助・卯助が替わったほかは同じ顔ぶれである。河内屋喜兵衛は、『大和名所図会』以降の籬島の名所図会の板元に名を連ねている。板本はいずれも題簽の位置は表紙左上で、序文はなく、iは見返を付し、iiは付さない。iについては、河内屋源七郎板より後で著屋宗八板より早い時期のものと確められるのだが、iiは全体を通じて匡郭を修正しており、比較して板行の時期を知ることにはできない。なお、籬島の名所図会の『拾遺都名所図会』『撰津名所図会』『東海道名所図会』『木曾路名所図会』にも、書肆に数軒の違いはあるが、江戸の須原屋茂兵衛、京都の吉野屋仁兵衛、名古屋の菱屋藤兵衛、大阪の河内屋喜兵衛等による年代不明の板がある。『京の水』のこれらの板は、名所図会のこういった後刷と同様につくられたのであろうか。

著屋宗八板

著屋宗八は向松堂と号する京都の書肆である。『近世出版広告集成』収載の目録を見ると、仏書を多くあつかっていたようである。籬島の著作との関連としては、『都名所図会』の後印本の一つに、ここにあげる著屋宗八、幸助、嘉助の三名を含む三都の

書肆による板がある。また、著屋宗八と河内屋喜兵衛、京都の越後屋治兵衛によって板行された『懷宝銅鑄花洛往古細図』⁽¹⁶⁾ という図があるが、これは「花洛往古図」をほぼそのままに縦一六・六cm、横九・一cmと小さくしたものである。著屋板には、a、b、cの三種類があるが、aとbについては板本の印刷を比較したところからは板行の順を知ることができなかった(cは最も遅い板である)。

a 天保十二年板

国会図書館蔵本(83122)がある。題簽は表紙左上にあり、見返と序文はない。刊記は「天保十二年辛丑春 京都書林寺町通三条下ル町めとき屋宗八」とあり、『裁縫独稽古』『精進魚類早見献立帳』『真州頭書朗漢朗詠集』の広告を付す。「大内裏御図」と「花洛往古図」を付す。いずれも図に板元の印はない。「花洛往古図」のみ本編と同色の表紙を付す。

b 無刊記板

京都府立総合資料館蔵本(BK1和29162 A381-2)(T1和29162 A381-2)、京都大学附属図書館蔵本(京都キ23)、筆者の所持本がある。題簽は表紙左上にあり、見返と序文はない。第二冊巻末に著屋宗八の蔵板目録「向書堂蔵版書目 京都寺町三条下ル町書林めとき屋宗八」(『陶淵明詩集』『日本詩礎』など計五三点⁽¹⁶⁾)一丁半がある。京都大学附属図書館蔵本と筆者の所持本は「花洛往古図」を付す。ともに本編と同色の表紙を付し、板元の印はない。

c 著屋宗八・幸助・嘉助板

内閣文庫蔵本(172169)、東京大学総合図書館蔵本(30 95)がある。ともに題簽の位置は表紙左上で、序文はない。内閣文庫蔵本には河内屋太助板のbにはじまる見返があり、東京大学総合図書館蔵本には見返がない。刊記は「皇都書肆 寺町通三条下ル著屋宗八 同錦小路上ル同幸助 御幸通二條南入同嘉助」とあり、刊記前に『増補校正掌中唐宋詩学類苑大成』の広告がある。『増補校正掌中唐宋詩学類苑大成』は慶応三年刊である。したがって早くとも慶応三年以降の板であろう。また、かなり板木が摩滅しているように見受けられる。内閣文庫蔵本は「花洛往古図」を付す。本編と同色の表紙を付し、板元の印はない。

以上、それぞれの板について整理してきたが、ここで板本の体裁の変化についてまとめておく。諸板で違いが見られた点には、題簽の位置、見返と序文の有無、広告・蔵板目録があげられる。まず、題簽の位置は小川・野田・吉野屋板では表紙の中央に

付されたものと表紙左上に付されたものの両方があり、統一されていないが、河内屋太助板以降はすべて表紙左上となる。見返は、初板以来の装飾枠に薄墨色で「京之水」とあるものは、板権が河内屋太助に移ってからは見られず、かわって著者と画工の名や内容の紹介を記した新たな見返が付されるようになる。大江資衡の序文については、小川・野田・吉野屋板では京都大学谷村文庫蔵本を除く全てに付されるが、河内屋太助の寛政三年の刊記を残す板を最後に付されなくなる。蔵板目録では、小川・野田・吉野屋板のうち寛政二年の刊記をもつ茨城大学図書館菅文庫蔵本と寛政三年の刊記で本文改変後の板の京都大学谷村文庫蔵本に、それぞれ板元の一軒の、小川多左衛門と野田藤八の目録が付いている。吉野屋の目録を付すものは見あたらないものの、板元書肆がそれぞれに自身の目録を綴じこんでいたのであろうか。題簽の位置や見返の有無などを含めて、小川・野田・吉野屋板では、製本の仕方が多様である。

付属の「大内裏御図」と「花洛往古図」は、揃って本編二冊と共に所蔵されることが少ない。しかし、まず大江資衡の序文に「秋里子考訂平安城舊圖暨大内裏圖且編纂京之水二巻以為二圖之釋解」とあり、初板より本編二冊と二図であったことが確かめられる。そして、小川・野田・吉野屋板にのみ、この三軒連名の印が押される。二図ともに題簽は全て同じものが付されるが、表紙の有無や色は一貫していない。

最後に、冒頭に述べた、小川・野田・吉野屋板の刊記に訂正を施した板をめぐる出版事情について考えたい。まず、寛政二年正月の刊記をもつ板（駒澤大学図書館蔵本・同志社大学蔵本・茨城大学図書館菅文庫蔵本）について、寛政三年に訂正した貼紙が剥がれた可能性だが、これらにはいずれもお茶の水女子大学蔵本・龍谷大学写字台文庫蔵本にある貼紙の大きさに相当する剥離跡は見られず、もともと貼紙はなかったものと思われる。これらがそのまま出回ったことについては不明であるが、この刊記を刷ったものに寛政三年四月発行とする年記の紙が貼られ、この訂正の紙を刷った板木を寛政二年の刊記に入木して寛政三年板が刷られていく。貼紙による訂正の理由としてまず考えられるのは、刊年の干支に誤りがあることである。寛政二年の干支は庚戌だが、この刊記は「寛政二載庚酉正月」となっており、直す必要があった。加えて、大江資衡の序文（寛政二年正月の刊記をもつ板本にも付される）は寛政二年冬至のもので、実際の板行はこれ以後ということになる。では、著者離島も造営に出勤しており、内裏と平安京を解説したこの作品の執筆に深く関わると考えられる寛政初頭の内裏再建の日程との関係を見てみる。離島の編と考えられる、造営の記録を集めた書物『もしき』⁽¹⁹⁾には次のようにある。

禁裏御所 戊八月廿六日御上棟祝賀 九月廿六日ヨリ御安鎮 十一月廿六日御遷幸
仙洞御所 戊九月五日御上棟 十月十二日御安鎮 十一月廿六日御遷幸
女院御所 戊九月五日御上棟 十二月四日御遷幸

また『もしき』には「新宮成後以手書示源大樹」と題する寛政三年春御製の詩もある。ここからは、寛政二年十一月から十二月にかけて遷幸という内裏の完成状況がわかる。そうすると『京の水』が寛政二年冬至の序文を付して訂正後の刊記の寛政三年四月発行というのは、内裏の完成を見ての出版ということになるのである。

三 まとめ

本稿では、『京の水』の諸板について整理してきたが、そのなかでこの本の出版について明らかになったのは次のようなことである。『京の水』の初板は、小川多左衛門・野田藤八・吉野屋為八によって刊行された。はじめは寛政二年正月の刊記が刷られたが、この刊記には干支に誤りがあり、寛政三年四月の年記で訂正が施され、さらに訂正部分を入木して刷った板本がつくられている。これは寛政初頭に再建された内裏の完成を見ての出版である。また寛政三年板の後刷では本文に改変が加えられている。板元は後に河内屋太助、河内屋源七郎、河内屋喜兵衛、著屋宗八らに替わっている。このようにして初板以来繰り返し出版され、刊記や本文などの明らかな差異に拠るところで、少なくとも一三種類⁽²⁰⁾の板本が確かめられるのである。

注

- (1) 『国文』第百三号（平成十七年七月、お茶の水女子大学国語国文学会）所収。
- (2) 色合いは諸本で少しずつ異なるが、一貫して青色である。
- (3) (4) (5) (6) (7) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。
- (8) 京都大学電子図書館画像による。
- (9) この板の出版がいつかは特定できないが、もし蔵板目録の「二十四輩名所図会 全部十冊」とあるのが「二十四輩順拝図会」（了貞編）のことであれば「二十四輩名所図会」という書目は『国書総目録』にも確かめられない、このうちの後編五冊は文化六年刊であり、この板は早くとも文化六

年以降のものということになる。

- (10) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。(6)とは別の板本である。
- (11) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。
- (12) 井上和雄編、坂本宗子増訂。昭和四五年、高尾書店刊。
- (13) 昭和五八年、ゆまに書房刊。
- (14) 国文学研究資料館蔵のマイクロフィルムによる。
- (15) 東京都立中央図書館加賀文庫蔵。
- (16) aの天保十二年板に広告のある『裁縫独稽古』(天保三年刊)『精進魚類早見献立帳』(天保五年刊)『真艸頭書と漢朗詠集』(天保六年刊)も収載される。これらの書日がaの板において比較的新しく刊行されたものを広告したものであるならば、それらがbの蔵板書目に入っていることから、bの板がaの板より後のものである可能性が考えられる。
- (17) 第二冊に寛政二年の刊記がある同志社大学蔵本の「花洛往古図」には、この印がない。しかし同帙の第一冊は後刷本と考えられ、この図が初板に付されていたものかどうかはわからない。また龍谷大学図書館写字台文庫蔵「花洛往古図」に印がない。
- (18) 寛政期の内裏造営の記録を集めた『ももしき』という書物には、籬島の跋文を付すものがあり、籬島が造営に出勤したことや『ももしき』は籬島がその際に書きおいたものであることが記される。拙稿『「京の水」考』(前出)では、大火を経て内裏が再建されるなか古式の内裏への関心が高かったことや籬島自身が造営に関わっていたことが『京の水』の執筆の要因ではないかと考えた。
- (19) 国文学研究資料館蔵の石川県立図書館李花亭文庫蔵本のマイクロフィルムによる。
- (20) ほかに林芳兵衛板(金沢大学附属図書館北条文庫蔵本)、平野屋茂兵衛板(奈良県立図書館蔵本)があることを知り得たが、これらは未見である。

(二〇〇五年二月一日受理)

The Printings of *Kyō no mizu*

FUJIKAWA Reman

abstract

Kyō no mizu is a work by Akisato Ritou who is famous for Meisho zue. The constructions in the Imperial Palace and the system of the Heian-kyō capital are explained in *Kyō no mizu*. In this article, we classify its printings and examine circumstances of its publication.

The first edition of *Kyō no mizu* was published by Ogawa Tazaemon, Noda Touhachi and Yoshinoya Tamehachi. Among their printings, we find books whose imprints were corrected by pasting a piece of paper dated April 1791. This strange correction was made in a situation as follows. First, the imprint dated January 1790 was printed. However, since there was a mistake in the representation of the year, it was corrected in the way mentioned above. After that, the corrected date was actually engraved and printed. Comparing this date with the record of reconstruction of the Imperial Palace burned down in 1788, we suppose that this work was published after the reconstruction had completed.

The subsequent printing with the imprint dated 1791 had an alteration in the text, and the copyright of this work was passed to Kawachiya Tasuke, Kawachiya Genshichirou, Kawachiya Kihee, Metogiya Souhachi and so on.

Key words : *Kyō no mizu*, Akisato Ritou, printings, Imperial Palace, Heian-kyō